

同窓会だより

新潟大学歯学部同窓会の活動について

新潟大学歯学部同窓会会長 多和田 孝 雄

会長に就任して7年が経過し、今年度から4期目も後半に入りました。同窓会の既存事業につきましては、それぞれの部署において役員が熟練しており、成熟のレベルに達しつつあります。彼らはそれぞれが会員のことを真摯に考え、常に事業の改善を図っております。そこに我々の同窓会の強みがあり、活力の源泉となっております。

しかし、私が会長に就任して以来、毎年ように外的要因による非日常的課題も発生しており、今年も年度が改まる前の3月11日に東日本大震災及びそれに続く福島第1原子力発電所の被災による大きな事故が発生してしまいました。同窓会では、迅速な情報収集とともに義援金の募金を審議、決定して会員にお願いをしました。7月1日現在で約480万円の義援金が寄せられており、今後はその分配作業に入ることになります。義援金をお寄せ下さいました皆様には心より感謝申し上げます。

現在、我々の会員は2,379名に達しており、全国に17支部、支部のない地域には都府県代表幹事を配置してほぼ全ての会員所在地を網羅しております。また、同窓会の悲願であった東京支部の設立も近々実現の予定です。約160名という新潟に次ぐ数の会員が在住する東京ではその数の故に設立は困難と思われていましたが、同窓会本部からの呼びかけに地元の会員が立ち上がって下さいました。是非とも設立に成功して東京在住会員の親睦と交流の場に育てていただきたいと願います。

臨床研修医・準会員支援部では本年6月30日に第2回の「臨床研修医支援塾」を開催し、31名の臨床研修医が受講しました。講師を前年度研修医の会員にお願いして、臨床研修期間中の体験談や

アドバイスをいただきましたが、話題が新鮮であり、かつ現研修医も抱えているであろう悩み等への言及もあり、全員が真剣に受講しておりました。その他に同窓会側からは研修終了後の就職支援等の説明がありました。

女性会員支援部では、今年度の新たな取り組みとして、全国の同窓会支部長、都府県代表幹事をお願いして、それぞれの地域での同窓生の近況、地域のグルメ、観光スポット等をメールを利用して会員に配信するサービスを開始しました。日本列島の各所に居住する会員の周辺情報を共有することにより、同窓生の一体感を醸成することに役立つと思われま

す。本年度は、東京で同窓会支部長会議が開催されます。全国から14名の支部長が集い、東京支部立ち上げ関係者もオブザーバー参加の予定なので、総勢25名の会議になります。

末尾になりましたが、この度の東日本大震災で被災された方々にお見舞いを申し上げますとともに、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

2011年度新潟大学歯学部同窓会総会を終えて

副会長 鈴木 一 郎

去る4月23日に同窓会総会が開催されました。例年、歯学部で行っている総会ですが、今回は新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」(講義室A)での開催となりました。「ときめいと」は駅南プラカ1の2階、新潟駅東側自由通路のビックカメラに隣接する交通至便な場所にあります。

20名の参加者のもと、まず2010年度の逝去会員(6名)および東日本大震災の犠牲者に対して黙禱が行われました。続いて会長から挨拶があり、



東日本大震災への対応や中山均君(D16)が市議会議員に返り咲いた事などの報告がありました。

次いで、専務理事から議案書に基づき、2011年度の人事、2010年度の活動報告、2011年度の活動計画の報告がありました。続いて協議が行われ、まず2011年度の一般会計、特別会計につき会計部担当理事より予算案の説明があり、それぞれ承認されました。その他の協議題として、東日本大震災への対応に関して40分ほどの時間を割いて議論が交わされました。まず、会長より、今回の震災における情報収集とその概要が報告されました。



幸いなことに会員の中に死傷者はいなかったものの、診療所や自宅の被災はかなりの数にのぼります。同窓会では、2004年の新潟県中越地震の際に策定した見舞い規約がありますが、その中で、①同窓会費を財源とするもの、②大規模災害を想定した義援金を財源とするもの、のいずれを今回の大震災に際して適用するかが議論の中心となりました。歯科材料の支援はどうか？ 現在把握されているよりも多くの被災者がいるのではないかと（長期の情報収集が必要）？ 休診に対する補償はどうか？ 等々様々な意見が出され、義援金を集める方向で具体的な支援内容も含めて今後の同窓会会議にて議論することになりました。

17時半より総会学術講演として43名の参加者のもと、口腔生命福祉学科鈴木昭先生による「『子ども虐待時代』の子ども家庭福祉一つながりの修復を目指してー」がありました。鈴木先生は長く新潟県の福祉行政で活躍された後に新潟大学の教職につかれた方で、長年の行政での経験に基づいた虐待発生の要因や具体的な対応策について熱く語られました。講演の最後は、論語の「徳不孤 必有隣」（徳は孤ならず 必ず隣有り）で締められましたが、バーチャルなコミュニティーが拡大する一方で、家庭や地域といったリアルコミュニティーの欠如が虐待の大きな背景となっていることを改めて実感しました。

総会後は、駅南の居酒屋「宵の肴」で学術講演講師の鈴木先生も含めて16名が参加して盛大な懇親会が開催されました。

歯学部同窓会総会の学術講演会 「『子ども虐待時代』の子ども家庭福祉一つながりの修復を目指してー」の講演を聞いて

(2011年4月23日 口腔生命福祉学部教授・鈴木昭先生)

新潟市議会議員 中山 均

今回の講演は、歯科医としてだけでなく、2期目の新潟市議会議員活動を開始する私にとっても期待の大きく興味深いものでした。





以下、講演の概要を記しながら感動を述べたいと思います。

まず、近年注目される独居高齢者や子ども虐待など、「福祉」の新しい課題は、さまざまな「つながり」が切れた時とリンクしている問題であることを基本的な観点としながら、その要因として、家族・地域・社会のあり方、そしてその背景にある経済的な問題が大きいことを指摘されました。これは、社会問題に取り組んできた市民活動家としても納得するものです。また、これに関連して紹介された「母親になるのにベストな国ランキング」(NGO「セーブ・ザ・チルドレン」調べ)で日本は30位以内にも入らないという現実、「豊かな」はずの日本の政治の貧困さを表わしており、政治と医療の両方に携わる者としても考えさせられます。

次に、虐待などに関する御自身の行政の現場での経験などから、胸が痛むようなお話も多聞けました。そうした経験を踏まえ、「虐待している家族への相談援助や福祉サービスを行き届け、社会とのつながりを回復する支援」「虐待死への転化を阻止するための支援介入」「相談の社会化」などが必要という観点は極めて重要だと感じました。また、一時保護所などの場で、歯科医による口腔検診が、「自分にもきちんと向き合って時間を取って診てくれる」安心の機会になっているというエピソードは、歯科医である私たちを対象にしているために多少脚色があるのかもしれませんが、歯科医の立場の重要性を再認識できます。

子どもたちを支える出発点として、「安全、安心の時間、空間」「大切にされているというメッセージ」「自尊心、自己肯定感情の涵養」「生きる力の涵養」が重要であり、一時保護所でそうした機能を果たそうとされてきた先生のお話からは、先生が出会った子どもたちへの温かいまなざしが強く感じられました。また、「子どもから見た好きな援助者像」として示された、「つまらない話でも本気で聞いてくれる」「具体的な示唆はするが押し付けない」「潜在的な可能性や言葉にならない思考、感情に注目する」「ここぞというときはつきり善悪を

伝えてくれる」というあり方は、子どもを持つ者にとって大切であるばかりでなく、社会関係の中で人と接する際にも大切なあり方かもしれないと思いました。

最後に、講演のテーマのキーワードでもある「つながり」という観点から、私たち社会の「大人」の役割を、「子どもの外界と内界」「子どもと親」「子どもと社会環境・地域」「時間」「夢と現実」をそれぞれをつなぐことであり、そのためには大人自身にとっても自己肯定・自己受容・自信が大切だと述べられました(特に「子どもと親」をつなぐというのは「虐待している親も受け入れる」ということであり、「時間」をつなぐというのは過去の体験を未来にとって意味あるものにするということです)。きわめて示唆に富むお話でした。

スペースの都合と私の能力の限界でこの優れた講演の内容を十分お伝えできませんが、子どもたちへの先生の温かい愛情や人間性、熱意を感じた講演でした。ありがとうございました。

平成23年度歯学部同窓会 学術講演会を拝聴して

口腔生命福祉学科4年 糠塚 梓

今回、私が所属している新潟大学歯学部口腔生命福祉学科の学科長である鈴木昭先生の講演を聴かせていただき、大変貴重な勉強をすることができました。

テーマは「児童虐待について」です。近年の児童虐待の報告件数は増加傾向で平成21年度では44,210件を記録し過去最多となりました。児童虐待は、親の特性だけでなく経済問題や養育環境等さまざまな要素がつながり発生します。

そのような被虐待児を歯科関係者は発見しやすい環境にいます。歯科関係者には、1.6歳児・3歳児歯科健康診査や、乳幼児歯科相談あるいは就学時歯科健診や学校歯科健診などで児童に接する機会があります。その診療で頭部や顔面の暴力の痕や、多数歯う蝕等、口腔内外に問題のある乳幼児・





児童を見つけることができます。乳幼児・児童の口腔内にこのような問題がある原因には、育児の上で保護者の歯科保健に対する知識と行動、保護者の経済的な問題などの環境、そして保護者と子供との関係が挙げられます。そして、その子どもを養育する親の養育の放棄・怠慢（Neglect）を疑うことができ、追跡調査等を保健師等に依頼する等、対策をとることができます。歯科関係者は、専門家としての立場から、虐待に対する理解と対応が必要だと思いました。

一時的に親から子どもを保護するために、子どもは一時保護所という施設に入所します。一時保護所での歯科診療では、平等に行われる診療に対して、子どもは「大切に扱われている」感覚を体験することができ、安心感を覚えることができます。また、普段から行うブラッシングにおいても、「上手に磨けたね」等、子どもを褒めることにより、虐待により傷ついた子どもの自尊感情を回復することができます。そして自尊心を高め、日常生活行動が良くなり、子どもの自立へとつながります。先生の講演は、歯科分野からの被虐待児に対する支援の可能性について考える良い機会になりました。

さて、私は将来この口腔生命福祉学科を卒業して、行政で福祉の仕事に携わりたいと考えていま

す。今回の先生の講義を聴き、行政は時代に合わせたサービスを行う必要があると考えました。先生は学科の授業でも「“つながり”の切れた時に福祉のニーズは発生する」とおっしゃっていました。今回の講演でも“つながり”がキーワードとなりました。家庭の「つながり」が切れる（家庭が孤立する）原因は、経済成長に伴った労働者の都市への移住のために生じた近隣関係の希薄化や崩壊、近隣等のインフォーマルの援助関係の消失等があります。行政機関は自分から訪ねてきた人を相手に支援をする傾向があるので、現代においては、外部の社会と遮断された家庭に目を向ける必要があると思います。潜在的な福祉のニーズは「つながり」の切れたところに存在します。表からでは見えないところで重い問題を抱えた人がいることを念頭に置き、積極的にニーズを見つけて介入していくべきだと思います。また、同時に家庭内から助けを外部に訴えることのできる環境の整備が必要だと思います。先生がおっしゃった「相談の社会化」です。そして問題が解決した成功体験を通じて住民一人一人が横でつながることの快適さを感じることができ、お互いに支えあい、より良く生きることのできる社会になれば良いと考えました。

